

# 確率・統計 A

若木宏文

wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/wakaki/lecture/index.shtml>

2014.5.26

# 目次

## 確率変数と分布

離散型・連続型分布

多次元の場合

## 2.5. 離散型・連続型分布

### 2.5.2. 2次元の場合

## 2次元離散型分布と連続型分布

2次元確率変数  $(X, Y)$  の取り得る値の集合  $D$  が,  $\mathbb{R}^2$  の高々可算集合であるとき,  $(X, Y)$  は **離散型**確率変数, また,  $(X, Y)$  の分布を **離散型分布**という.

離散型分布は, 確率関数

$$f(x, y) = P(X = x, Y = y), (x, y) \in \mathbb{R}^2$$

によって決定される.

2次元確率変数  $(X, Y)$  分布関数が

$$F(x, y) = \int_{-\infty}^x \int_{-\infty}^y f(s, t) ds dt$$

と表されるとき,  $(X, Y)$  は **連続型**確率変数, また,  $(X, Y)$  の分布を **連続型分布**という.

$f(x, y)$  を  $(X, Y)$  または,  $(X, Y)$  の分布の**確率密度関数**という.

## 2次元確率関数と確率密度関数の性質

- 確率関数 (離散型)

$X$  の取り得る値を  $x_1, x_2, \dots$ ,

$Y$  の取り得る値を  $y_1, y_2, \dots$  とすると

$$(1) f(x_i, y_j) \geq 0, \quad i, j = 1, 2, \dots$$

$$(2) \sum_{i=1}^{\infty} \sum_{j=1}^{\infty} f(x_i, y_j) = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(x, y) = \sum_{x_i \leq x} \sum_{y_j \leq y} f(x_i, y_j)$$

- 確率密度関数 (連続型)

$$(1) f(x, y) \geq 0, \quad \forall (x, y) \in \mathbb{R}^2$$

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f(x, y) dx dy = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(x, y) = \int_{-\infty}^x \int_{-\infty}^y f(s, t) ds dt$$

$$\left( \frac{\partial^2}{\partial x \partial y} F(x, y) = f(x, y) \right)$$

## 3項分布

1回の試行で事象  $A, B, C$  のいずれかが起こりうる。  
 $A$  が起こる確率を  $p_1$ ,  $B$  が起こる確率を  $p_2$  とする。  
事象  $C$  が起こる確率は,  $1 - p_1 - p_2$  である。

$n$  回の独立な試行で,  $A$  が起こる回数を  $X$ ,  $B$  が起こる回数を  $Y$  とすれば

$$\begin{aligned} f(x, y) &= P(X = x, Y = y) \\ &= \frac{n!}{x!y!(n-x-y)!} p_1^x p_2^y (1-p_1-p_2)^{n-x-y} \\ &((x, y) \in D; 0 \leq p_1, 0 \leq p_2, p_1 + p_2 \leq 1) \end{aligned}$$

ただし,  $D = \{(x, y); x, y \text{ は非負整数}, x + y \leq n\}$ .  
このような分布を, パラメータ  $n, (p_1, p_2)$  をもつ **3項分布** といい,  
 $M_3(n, (p_1, p_2))$  と表す。

## 2次元正規分布

$(X, Y)$  の確率密度関数が

$$f(x, y) = \frac{1}{2\pi\sigma_1\sigma_2\sqrt{1-\rho^2}} \exp \left[ -\frac{1}{2(1-\rho^2)} \left\{ \left( \frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right)^2 - 2\rho \left( \frac{x-\mu_1}{\sigma_1} \right) \left( \frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right) + \left( \frac{y-\mu_2}{\sigma_2} \right)^2 \right\} \right]$$

$$\mu_1, \mu_2 \in \mathbb{R}, \sigma_1^2 > 0, \sigma_2^2 > 0, -1 < \rho < 1$$

で表されるとき、**2次元正規分布**という。

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \rho\sigma_1\sigma_2 \\ \rho\sigma_1\sigma_2 & \sigma_2^2 \end{pmatrix}$$

とおくと

$$f(x, y) = (2\pi)^{-1} |\Sigma|^{-1/2} \exp \left\{ -\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})' \Sigma^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}) \right\}$$

と表せるので、 $(X, Y)$  の分布を  $N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$  と表す。

## 周辺分布

- $(X, Y)$  が離散型で、その確率関数を  $f(x_i, y_j)$ ,  $i, j = 1, 2, \dots$  とすると、 $X$  は離散型で、その確率関数は

$$f_X(x_i) = P(X = x_i, Y \in D_y) = \sum_{y_j \in D_y} f(x_i, y_j), \quad D_y = \{y_1, y_2, \dots\}$$

- $(X, Y)$  が連続型で、その分布関数を  $F(x, y)$ , 確率密度関数を  $f(x, y)$  とすると、 $X$  は連続型で、その確率密度関数は

$$F(x, \infty) = \int_{-\infty}^x \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} f(s, t) dt \right\} ds \quad \text{より} \quad f_X(x) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x, t) dt$$

### 定理 2.10

- (1)  $(X, Y)$  が 3 項分布  $M_3(n, (p_1, p_2))$  に従うとする。このとき、 $X, Y$  はそれぞれ 2 項分布  $B(n, p_1), B(n, p_2)$  に従う。
- (2)  $(X, Y)$  が 2 次元正規分布  $N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma)$  に従うとする。このとき、 $X, Y$  はそれぞれ正規分布  $N(\mu_1, \sigma_1^2), N(\mu_2, \sigma_2^2)$  に従う。

(証明は板書で)

## 定理 2.11

$(X, Y)$  は離散型あるいは連続型.

$f_{X,Y}(x, y)$  : 同時確率密度関数

$f_X(x), f_Y(y)$  : および周辺確率密度関数

$\Rightarrow X$  と  $Y$  が独立であることと

$$f_{X,Y}(x, y) = f_X(x)f_Y(y), \quad (x, y) \in D = \{(x, y); f_{X,Y}(x, y) > 0\}$$

が成り立つことは同値である.

(証明は板書で)

## 2.5.3. 多次元の場合

## 多次元離散型分布と連続型分布

$k$ 次元確率変数  $\mathbf{X} = (X_1, \dots, X_k)'$  の取り得る値の集合  $D$  が,  $\mathbb{R}^k$  の高々可算集合であるとき,  $\mathbf{X}$  は **離散型**確率変数, また,  $\mathbf{X}$  の分布を **離散型分布**という.

離散型分布は, 確率関数

$$f(\mathbf{x}) = f(x_1, \dots, x_k) = P(X_1 = x_1, \dots, X_k = x_k), \quad \mathbf{x} \in \mathbb{R}^k$$

によって決定される.

$k$ 次元確率変数  $(X_1, \dots, X_k)'$  分布関数が

$$F(x_1, \dots, x_k) = \int_{-\infty}^{x_1} \cdots \int_{-\infty}^{x_k} f(s_1, \dots, s_k) ds_1 \cdots ds_k$$

と表されるとき,  $\mathbf{X} = (X_1, \dots, X_k)'$  は **連続型**確率変数, また,  $\mathbf{X}$  の分布を **連続型分布**という.

$f(x_1, \dots, x_k)$  を  $\mathbf{X}$  または,  $\mathbf{X}$  の分布の **確率密度関数**という.

## 多次元確率関数と確率密度関数の性質

- 確率関数 (離散型)

$X_i$  ( $i = 1, \dots, k$ ) の取り得る値を  $x_{i1}, x_{i2}, \dots$  とすると

$$(1) f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k}) \geq 0, \quad j_i = 1, 2, \dots \quad (i = 1, \dots, k)$$

$$(2) \sum_{j_1=1}^{\infty} \cdots \sum_{j_k=1}^{\infty} f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k}) = 1$$

$$\text{同時分布関数: } F(z_1, \dots, z_k) = \sum_{x_{1j_1} \leq z_1} \cdots \sum_{x_{kj_k} \leq z_k} f(x_{1j_1}, \dots, x_{kj_k})$$

- 確率密度関数 (連続型)

$$(1) f(x_1, \dots, x_k) \geq 0, \quad \forall (x_1, \dots, x_k) \in \mathbb{R}^k$$

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} f(x_1, \dots, x_k) dx_1 \cdots dx_k = 1$$

同時分布関数:

$$F(x_1, \dots, x_k) = \int_{-\infty}^{x_1} \cdots \int_{-\infty}^{x_k} f(s_1, \dots, s_k) ds_1 \cdots ds_k$$

$$\left( \frac{\partial^k}{\partial x_1 \cdots \partial x_k} F(x_1, \dots, x_k) = f(x_1, \dots, x_k) \right)$$

## 多項分布

1 回の試行で事象  $A_1, \dots, A_{k+1}$  のいずれかが起こりうる。

$A_j$  が起こる確率を  $p_j$  ( $j = 1, \dots, k$ )

事象  $A_{k+1}$  が起こる確率は,  $p_{k+1} = 1 - (p_1 + \dots + p_k)$  である。

$n$  回の独立な試行で,  $A_j$  が起こる回数を  $X_j$  ( $j = 1, \dots, k$ ) とすれば

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_k) &= P(X_1 = x_1, \dots, X_k = x_k) \\ &= \frac{n!}{x_1! \cdots x_k! x_{k+1}!} p_1^{x_1} \cdots p_{k+1}^{x_{k+1}} \quad (x_{k+1} = n - (x_1 + \dots + x_k)) \\ &\quad ((x_1, \dots, x_k) \in D; 0 \leq p_j \ (j = 1, \dots, k); p_1 + \dots + p_k \leq 1) \end{aligned}$$

ただし,

$D = \{(x_1, \dots, x_k); x_j \text{ は非負整数 } (j = 1, \dots, k), x_1 + \dots + x_k \leq n\}$ .

このような分布を, パラメータ  $n, (p_1, \dots, p_k)$  をもつ **( $k+1$ ) 項分布** とい  
い,  $M_{k+1}(n, (p_1, \dots, p_k))$  と表す。

## 多変量正規分布

$(X_1, \dots, X_k)'$  の確率密度関数が

$$f(x_1, \dots, x_k) = (2\pi)^{-k/2} |\Sigma|^{-1/2} \exp \left\{ -\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})' \Sigma^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}) \right\}$$

と表せるとき,  $k$  次元正規分布に従うという. ここで

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_k \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \vdots \\ \mu_k \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \cdots & \sigma_{1k} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \sigma_{k1} & \cdots & \sigma_{kk} \end{pmatrix}.$$

パラメータ  $\boldsymbol{\mu}$  は任意の定数, すなわち,  $-\infty < \mu_i < \infty$  ( $i = 1, \dots, k$ ) で,  $\Sigma$  は正定値行列である.

## 定理 2.12

$(X_1, \dots, X_k)'$  は離散型あるいは連続型.

$X_i, i = 1, \dots, k$  の周辺確率密度関数を  $f_i(x_i)$ ,

同時確率密度関数を  $f(x_1, \dots, x_k)$  とする.

このとき,  $X_1, \dots, X_k$  が独立であることと, 任意の

$(x_1, \dots, x_k)' \in \{(x_1, \dots, x_k)'; f(x_1, \dots, x_k) > 0\}$  に対して

$$f(x_1, \dots, x_k) = f_1(x_1) \cdots f_k(x_k)$$

が成り立つことは同値である.